

令和2年度
劇場・音楽堂等機能強化推進事業
(地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
成果報告書

団 体 名	公益財団法人神戸市民文化振興財団	
施 設 名	神戸文化ホール	
助成対象活動名	普及啓発事業	
内定額(総額)	7,527	(千円)
公演事業	0	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	7,527	(千円)

(1) 令和2年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(2) 令和2年度実施事業一覧【人材養成事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	
1				目標値	
				実績値	
2				目標値	
				実績値	

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

(3) 令和2年度実施事業一覧【普及啓発事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	神戸文化ホール インリーチ・アウトリーチ※	令和2年11月～ 令和3年2月	(インリーチ) オペラ「泣いた赤鬼」 令和3年2月3日・4日 出演・指揮：井村誠貴、神戸市室内管弦楽団、神戸市混声合唱団 (アウトリーチ) 神戸市内小学校での音楽劇や楽器演奏 令和2年11月～令和3年2月 ・低学年プログラム(出演：神戸市混声合唱団)【11校】 ・高学年プログラム(出演：神戸市室内管弦楽団、神戸市混声合唱団)【15校】	目標値	16,000
		神戸文化ホール 市内小学校		実績値	4,300
2	神戸文化ホール サマージャンボリー2020 ワシュワシュ! アドベンチャー※	令和2年 8月15日・16日	8月15日 ① ホール遊び「忍者になってディスタンス」 指導：アフタフ・バーバン関西 ② WS「ミニちんどん太鼓をつくろう」 指導：ケセランばさらん ③ 朗読劇「チョコレット」 出演：善竹忠亮 台本/演出：岩崎正裕 音響/Alain Nouveau 8月16日 ④ 人形劇「グリムのかばん」 脚本/演出/操演：くすのき燕 ⑤ WS「ペパニカをつくろう」 指導：岡田路子 ⑥ 屋外パフォーマンス「nomad note dance」	目標値	1,350 変更後 442人
		神戸文化ホール (大ホール・公園)		実績値	250

※ …新型コロナウイルス感染症の影響があったもの

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価

社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。

当財団では、「中期経営計画 2021」において、基本理念として自らの社会的役割（使命）を「神戸市民の文化活動の振興に資する事業を行い、もって個性豊かな魅力ある神戸文化の創造に寄与する」こととし、この基本理念と合わせて「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」（以下：劇場法）及びその指針に従って「事業方針」を立てている。

当該「事業方針」では、神戸文化ホールをホームグラウンドとする神戸市室内管弦楽団と神戸市混声合唱団を活かした「芸術文化の創造・発信」、教育機関などと連携した“インリーチ・アウトリーチ”を中心とする「普及啓発」を大きな柱としおり、令和2年度もそれらに基づいて事業を組み立て取り組んだ。

このほかホール自主事業の方針として「『観る（鑑賞）』『育つ（教育・普及）』『創る（創造・発信）』が循環する事業展開」、「当財団のネットワークを活用した事業展開」、「長年の神戸文化ホールを管理運営により培ってきたノウハウ・資産の運用」があり、“神戸文化ホールサマージャンボリー”では、そこに社会包摂の視点をより色濃く反映させ、取り組んだ。

なお、令和2年度は新型コロナウイルスの影響により、年度の前半に予定していた取組の多くは中止・延期を余儀なくされ、スケジュールや内容が大幅に変更（規模縮小等）となった。

事業実施に際しては、入場者・参加者数の制限をはじめとした感染予防策を講じる一方で、リモートでも参加できる取組みとして、事前のメッセージ募集や、事後のダイジェスト動画配信など新たな試みを取り入れ、基盤整備の充実とともに可能な限り上記の方針に沿った事業遂行に努めた。

助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。

助成により、これまで手掛けることの無かった分野や新しい表現に取り組むことができ、また、若年層でも参加しやすい料金設定を実現することで新規客層の誘致ができています。

さらに、小学生を対象とした“インリーチ”・“アウトリーチ”事業についても継続的に実施することで、未来を担う子どもたちに平等な文化芸術体験を担保できている。

結果としてホールのブランドを育みながら文化的・社会的・経済的意義のある活動を新たに開拓することにつながっている。

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

地域の基幹ホールの役割の一つである社会包摂の重要性を認識し、ホールを本拠地とするプロ楽団や地元ゆかりのアーティストとともに、さまざまな事情によって質の高い実演芸術に触れる機会が持てない子ども等を含め積極的にその場を提供すること、また、ホールを「新しい広場」「世界の窓」として、地域の人々が気軽に訪れて交流を図り、子どもの頃から良質な芸術文化に触れる機会を幅広く提供する場とすることを目標とし、事業に取り組んだ。

複数年をかけ、市内小学生全員を対象とした“インリーチ・アウトリーチ”では、新型コロナウイルスの影響で、事業の開始は遅れたものの、小学校や地元音楽家等と連携し、多くの子ども達に本格的な実演芸術に触れる機会を提供することができた。

“神戸文化ホールサマージャンボリー”においても、「子どもたちが文化芸術に触れる機会の提供」や「地域の人々が気軽にホールに訪れ交流し良質な芸術文化に触れる機会の提供」など目標に沿ったプログラムを展開することができた。新型コロナ第二波の渦中ということもあり、結果的には目標の集客を達成することは出来なかったが、リモートや屋外利用などコロナ禍を反映した新たなプログラムに挑戦することで、「新しい広場」としての可能性を模索することもできた。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。

アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間については、現実的に実施可能なものを計画していたが、新型コロナウイルス感染拡大に伴い、春の緊急事態宣言の影響で、当初予定していた公演（“神戸文化ホールスプリングジャンボリー”）を断念し、“神戸文化ホールサマージャンボリー”についても開催3か月前に内容を新たに組み替え、感染対策のために一人芸や屋外を使ったパフォーマンス、リモート参加などウィズコロナならではのプログラムを組み入れつつ、文化芸術を介した交流・体験・刺激という狙いを満遍なく盛り込むことができた。アウトリーチ事業では、小学校を訪問して行うという事業の性質もあり、結果的に上半期に予定していたものについては調整・実施することが困難であった。

一方、事業費については、感染対策や、動画配信等をはじめコロナ禍における試行的取組のための追加費用が必要となる中、規模の縮小も含め効率性を高め、概ね計画通り進めることが出来た。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

小学生をホールに招待して開催するオリジナル制作の子ども向けオペラ公演「泣いた赤鬼」は、ホール付のプロ樂團である「神戸市室内管弦樂團」「神戸市混声合唱団」を有する神戸文化ホールの機能を最大限に発揮した“インリーチ”事業であり、本事業の実施を通じ、劇場の存在あるいはオペラという芸術を体験として子ども達に知ってもらい、芸術に触れることで感性を育み、社会性を身につけるといふ社会教育の一助を担うことができた。

また逆に、同樂團が市内の全小学生を対象に学校を訪問する“アウトリーチ”事業でも、多くの子ども達に上質な生演奏の体験や楽器に触れる機会を提供することができた。

さらに、当ホールが新しい文化芸術の創造拠点として、実験的に取組んだ“神戸文化ホールサマージャンボリー”では、誰もが気軽に斬新な文化芸術に触れることのできる機会を創出することを目的とし、“空間を遊ぶ”観念に立ってホールの魅力を体感するプログラムや、“紙で作った本格的なオリジナル楽器”を製作するワークショップ、狂言と朗読を融合させた新しいスタイルの演劇、身近な台所用品をそのまま使った人形劇や屋外の風景をありのままに活かした自然派のコンテンポラリーダンスなど“見たことのないパフォーマンス”に取り組み、新型コロナの影響も一部前向きに受け止め、ウィズコロナの新しい価値観と創造性を反映したプログラムを考案し、実施することができた。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながった（と認められる）か。

“インリーチ”事業では、劇場という場を知らない市内（＝地域）の子どもたちを当ホールに招待することで、実演芸術を肌で体感し、また文化芸術や劇場への興味や親しみを感じてもらうきっかけを創出できた。

“アウトリーチ”事業では、ホール付きの楽団および地元音楽家団体とも連携協力し、市内小学校や地域の商業施設などで演奏を行うことで、実演芸術にあまり関心の無い人を含め、より多くの人が生演奏に触れ、その魅力を知ってもらう機会を創り、劇場とは異なる場所での体験を通じ、人と劇場がとつながる取組を実施することができた。

“神戸文化ホールサマージャンボリー”では、これまでも独創性に富み、新しい表現に挑戦する地元ゆかりの表現者や、地元の大学などでアートマネジメントを学ぶ若い人材を運営スタッフとして積極的に採用することで、観客や参加者がリピーターにとどまらず着実に入れ替わりながら微増し、地元根差して活動する人材（アーティストやスタッフ）が増えつつあり、ホールを取り巻くさまざまなタイプの協力者を創出できている。

それぞれの事業において、劇場の内外、劇場への関心の有無に関わらず、地域のさまざまな人材と交流、連携しながら、舞台芸術の楽しみを伝え、届けることで、神戸（地域）における文化芸術の発展につながったと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展する（と認められる）か。

平成 29 年度から実施している“インリーチ”事業では、普段、劇場や舞台芸術に触れる機会のない子どもたちをホールに招待し、実演芸術を肌で体感してもらうことで、文化芸術や当ホールへの興味あるいは親しみを感じてもらうきっかけを創出し、“将来の鑑賞者・ファン”を生み出し、当ホールおよび楽団が持続的に発展するための種まきの効果期待できる。

また、平成 24 年度から実施している“アウトリーチ”事業は、ホール付きの楽団および地元音楽家団体とも連携し、複数年をかけ市内の全小学生を対象とし演奏訪問を行うことで、当ホールの活動に対する理解や認知度の向上はもちろんのこと、教育機関や地元音楽家との信頼関係、相互協力関係を着実に構築することができ、当ホールが地域から愛される組織として持続的に発展するための基盤となる事業となっている。

“神戸文化ホールサマージャンボリー”は当ホールが「新しい広場」「世界の窓」として機能することを目指して平成 30 年度から始めたものであるが、都市公園内で自然にも恵まれ、周辺には図書館や体育館等の施設がある文教エリアという立地等を活かし、舞台芸術への興味の有無に関わらず、幅広い年代の、特にホールに訪れたことの無い人たちが集う機会となるようにネットワークと新たなアプローチを駆使してプログラムを企画してきた結果、回を重ねる毎に催しそのものの認知が広まり着実に注目を集めるようになっている。

令和 2 年度はコロナ禍で当初の計画から変更を余儀なくされ、実績的には課題の多いものとなったが、これからも引き続き、多様な人々が集まることを想定し、さらに懸案である身体や言語面でさまざまなハンディキャップを持つ人々が安心して集える場をも目指し、出てくる課題に真摯に向き合い、実験的な挑戦を続けていくことで、さまざまな関係者とのネットワークが構築でき、新しいアイデアを生み出しながら、結果的にホールが持続的に発展していくと考えられる。